

桜舞い散る、



その下に



メリ



くるくる落ちる桜の花びら。

くるくる、くるくる。

それが落ちゆく桜の木の根本には。

死体が、眠っているらしい。

時は、明治。

通りにはガス灯が点り始め明るいとは言え、少し大通りから外れてしまえばまだまだ江戸の時代そのままの暗闇が満ちていた。

東京ならまだしもこんな地方の都市なら尚更。

その暗闇の中では夜道を一人であるけば狐や狸に化かされる、なんて話もまだまだ信じられていた。しかしそれもこの頃若者達にはただの迷信深い年寄りのヨタ話としか受け取られない。

所謂幽霊話も例外ではなく。

「桜の木の下に幽霊？」

「知らねえのか京介、この頃流行ってるじゃねえか。真夜中に他から一本だけポツンと離れた桜の木に近付くと、髪が長くて長襦袢を着た女がスウツと立ってるのが見えるって言う話だ。」

「ふーん、桜の精かなんかとか」

「何似合わねえ事言つてんだよ、んなわけねえだろ。男に騙されて殺された遊女が埋められて、それで通り掛かる男を見ると自分を殺した男だと思つて憑り殺しちまうつて訳だ。」

「へえ、随分早とちりな幽霊もいたもんだな。で、どこだよ？」

「あ？」

「一本ポツンと離れた桜なんてどこにでもあるじゃねえか。何処の話だよ、面白いから見に行つてみようぜ。調度花見にも良い時期だ。」

「オ、オイ止せよ。本当に祟られたりしちゃたまんねえぜ。」

「何ビビつてんだよ、幽霊なんざいる訳ねえだろが。最近は科学つーのが発展してきて、鬼火とか幽霊とかもみいんなそれで解決出来ちまうらしいぜ」

「そりゃ京介は東京の人間だからな、そういう事も知つてて幽霊なんざ怖くねえのかもしれねえが……」

「そうだよ、お前えはこんな田舎でずっと暮らしてるから迷信深くもなるつてもんさ。で、何処なんだよ」

「俺も噂で聞いただけだから詳しい場所なんか知らねえよ」

「ハン、んなこつたるーと思つたぜ。どうせなんかの黄表紙か祭の幽霊小屋の話でも流行つてそれが流れて来たんだろ。」

「お前は現実的な奴だなあ」

「この時代はそうじゃなきゃやっていけねえぜい」

大体東京に居ればそんな話吐いて捨てるほど聞いたからな。幽霊話はいつでも何処でもあるもんだなあ……さて、じゃあ行くぜ」

「何処行くんだよ、桜の場所はわからねえのに」

「それはもういいだろ、せつかくの風流な春の夜だ、死んだ遊女とじゃなくて生きた遊女と遊びてえじゃねえか」

「本当にテメエは・・・」

呆れた様に言う遊び仲間と連れ立って、この都市唯一の遊び場へと出掛けたのだった。

この街唯一の遊び場は、それは東京には及びはしないがこの地方では一番の大都市ということもあってなかなか上玉もあり、春の陽気と共に賑わっていた。しかしこっちに来てまだ日が浅いので、そんなに馴染みもない。まあ睦みあいにはしたが、夜のうちに宿を出て家に帰ろうとした。

こっちに来てから住んでいる家は元々は祖父が使っていた妾宅で、山の方にあり街の中心部からは少し遠い。そういうモノは人の目から離れるように建てるから当然だが。

ブラブラ家路を歩いた。今日は満月で、提灯が無くて足元がハッキリと見えるほど明るい。山に近付くにしたがって増えてきた桜の花も綺麗に見えた。

曲がれば家に着く道をそのまま山の方に真っ直ぐ進んだのは何故だったか。宿で呑んだ酒がまだ少し残っていてほろ酔いの良い気分だったからか。春の夜があまりに気持ち良いのでまだ歩きたかったのか。

それとも、桜に呼ばれたのか。

とにかく、山に向かったのだ。
上で何が待つかも知らずに。

山とは言っても本当に小さなもので、幼少時には散々遊び回った場所だから夜でも別に不安は無かった。先に述べた様に明るい月もほとんど真上で、自分の影もくつきり見えた。

本当に桜の多い山で、周りの桜景色を楽しみながら歩いてやがて頂上に近付いた。すると頂上の所に少し木の無い空間が有ることに気付き訝しんだ。昔、あんな場所在っただろうか。覚えが無い。そこに近付き、その光景を見て息を飲んだ。

他の木はない少し空き地になった所にポツンと立つのは歳を経て見上げるほどに大きな枝垂れ桜。他に沢山あるこの山の桜は全て染井吉野だったのに。

そしてその枝垂れ桜にもたれ掛かるようにして。

長い黒髪の、桜に合わせたような淡い桜色の長襦袢を着た女が一人、座っていた。

これが、噂の、桜の下の幽霊だ。

それは、実際、この世のものとは思えない光景だったのだ。

桜は調度満開で、夜風に乗って視界を埋め尽くす桜色のなかで眠るその女が、余りに綺麗で。なのに、その肌は生きた人間とは思えないほど青白くて。後ろが透けて見えそうだった。薄い筈の桜の香りがむせ返るように香ってきて。

大振りの満月が調度枝垂れ桜の天辺にかかるところで。

あまりに、それは、幻想的な光景だった。

実際目の前の女は幽霊なのかもしれないが、怖がるにはあまりに綺麗すぎた。

しばらく呆然としていたら、ジジッと音を起てて提灯が消えたので慌てて蠟燭を出そうとして提灯を落としてしまった。

カラン。

「・・・」

音で目を覚ましたらしい女がゆっくりと臉を上げた。

「あ、えーと・・・」

どうしよう、憑り殺されるんだったっけっ

しかし女はしばらく訝しげな顔をした後で、

「・・・誰」

と掠れた声で言った。

「うーん、・・・君は幽霊っ？」

「そう見えるの」

「見えない事もないよ」

「一応まだ生きてる」

「そう、良かった」

とりあえず、殺されはしないわけだ。

安心したように言えば、女がますます困惑した様な顔をした。

「で、誰。新しい先生？」

「何それ。俺はまあ・・・通りすがりかな」

そう言うと女は呆れたように言った。

「それこそ何それ・・・貴方この辺の人じゃないでしょ」

「うん、違う。小さい頃はこの辺に少し住んでたけど」

「だったら知らないか。ここにはね、肺病持ちの療養所があるの。私も患者、と自分を指さしている。」

「だから地元の人はこの山の桜がどんなに綺麗でも近づかないの、肺病はうつるからね。貴方も早く帰った方が良いね」

自嘲するように少し笑っている。

だから声が掠れていたのか。でも。

「すぐ帰るのは嫌だな」

「はい？」

「君があまりに綺麗だから」

そう言うで一瞬彼女は止まって。

「プハッ・・・ハハッ」

笑ってから少し苦しげに咳をした。

「大丈夫？でもなんで笑うんだい」

「ゴメン、でもそんなこと言われたのはずいぶんと久しぶりでね。」

ああ可笑しい、こんなに笑ったの久しぶり、と涙を拭きながら言った。

「久しぶり♡意外だな」

「ここに来てからはね。その前はお客さんがずいぶんと言ってくれたものだけど」

「お客さん♡お女郎さんだったのか」

「そう、お客さんの一人が身請けしてここに入れてくれた」

「うまくやったものだね」

「有り難う。・・・貴方変わってるわ」

また面白そうに目を光らせて笑った。

「俺しばらくこつちにいるから、また来てもいい♡」

「私は良いけど。ここは退屈だから。でも物好きね、うつつても知らないから」

「なんだかうつらない気がするんだ。俺は京介。君は♡」

「リラって呼ばれてた」

「リラ♡・・・変わってるね、どんな意味」

「長崎出身だから。なんか花の名前だつて」

「ふうん、じゃ、またねリラ」

「本当に来る気なら、また。京介。」

勿論本当に行つた。しかも次の日に。

また桜の道を通つて頂上まで登ると昨日の枝垂れ桜の下に座っているリラを見つけてホツとした。

実は朝になつて思い出してみると昨日の光景は余りに綺麗すぎて、夢だったのではと不安になつたのだ。

「今日は、リラ」

声をかけると本を読んでいたリラが顔を上げた。

「うわ、本当に来たんだ」

顔をしかめられた。

「うん、本当に来た。ところでなんで外にいるの」

体に悪くない、それとも俺を待ってたの♡と聞くと馬鹿。と言われた。

「中は陰気くさいから嫌いな」

「悪化とかしない♡」

「今更よ、どうせ治りはしないから」

なんてことないように言う。

「此処に来たからには死にたくないんじゃないの」

「んー、とりあえず女郎のまま死ぬのは嫌だった。そしたら治療するなら身請けしてやるから死ぬなって私にベタ惚れの御隠居さんが言ってくれたから」

「うん」

「わかりました治療しますって言ったら此処に連れて来てくれて。」

「へー、本当にベタ惚れだったんだね。で、その人は」

「歳だったし、死んだんじゃない♡病気持ちの女を身請けなんかしてって一族から非難されたみたいで此処には最初連れて来て以来、来なくなったし」

「じゃありら一人ぼっちか」

「そう正真正銘一人ぼっち。・・・でも普通本人にそんなこと言う♡」

「これからは俺がいるよ」

「わあ嬉しい」

「一欠けらも信じてないね」

「信じられる要素が何処にあるの」

「確かに。じゃあこれから信じさせてくよ」

「長い長くねー。と空を見上げて笑ってみせた。

それから山に登り続けた。最初は胡散臭そうだったリラも何回か通ううちに警戒を解いてくれた。でもどれだけ通っても触るのは許してくれなかった。それだけうつつる可能性増えるから、と頑なに一定の距離を置いて、会うのもいつも空気が籠らない外だった。

「世の中に 絶えて桜のなかりせば 春の心はのどけからまし」

「・・・在原業平もまさか桜が完全に散ってから使われるとは驚愕でしょうね」

「でも本当にこの世に桜無かったら俺とリラ会わなかったかも」

今は青々と葉が繁った枝垂れ桜にもたれ掛かりながら俺が言う。もうすっかり夏だ。木陰は風邪が通って涼しい。

「もし来年の春に私が死んでいたら在原さんのもうひとつの歌が調度良いね」

「ハハ・・・笑えないから」

「冗談だつて」

冗談に聞こえない。

リラは春に会った時より明らかに痩せていた。

親父から手紙が来た。ここに居ることはやはりバレていたらしい。そろそろ限界だろうか。

「どうかしたの」

顔に出ているのかりラに心配そうに言われた。そろそろ涼しい風が吹き始めている頃だった。時折酷い咳をするリラに中入るべと聞けば頑なに拒否された。人ひとり分空けた距離もそのまま。咳している時に背中を摩ることさえさせてもらえない。

「なんでもな」

「くないでしょ」

「分かっちゃうべ」

「当然、舐めないで」

「・・・分かった、言うよ。」

俺は元々東京に住んでいた。俺の家は割と名家で、資産というものも結構あった。ところで俺の母親は親父の正妻じゃない。俺の母親がまだ俺が小さいうちに亡くなった時、妾の産んだ子ということで正妻は俺を引き取るのを拒否した。それで妾の子は妾へ、ということでごつちに住んでいた祖父の妾さんに寮に入れるようになるまではと預けられたのだ。

「ばあちゃんはとても俺に優しかったよ」

「へえ」

「じいさんも全然来なくなってたからな。寂しかったのかもしれない」

「そう・・・あなたのおばあさんもここで一人ぼっち、だったの」

「うん、知り合いもないしね。俺が家出る時には泣いてた」

そして一人ぼっちのまま死んだ。俺は寮でその知らせを聞いた。死に目にも会ってやれなかった。

「遺言でね、此処の住んでた家は俺にやるようになって言ってくれた」

「・・・おばあさん、よっぽど嬉しかったんだね、京介と一緒にいられて。一人ぼっちじゃなくなつて」

解る気がする、とぼつりとリラが呟いた。

そして学校を卒業したところで問題が起こった。俺は学校を出してもらっただけで十分だから普通に就職しようと思ったのに、親父が俺も認知して、それどころか正式な後継ぎにしたいと言い出したのだ。正妻に男の子はいないが、面白くないのは当然だ。

今までは居ない様に扱っていたのに後継ぎの男が必要なら呼び戻すのか。あの家に俺の居場所はないのに。

それが嫌でこつちに、ばあちゃんが残してくれた家に逃げていた。逃げていても何にもならないのを知りながら。

「結局は俺も同じだよ・・・俺も独りさ」

自嘲するように言った。

「何言ってるの」

急に強い調子でリラが言った。

「え」

「京介はうまくやれば名家の後継ぎなんて良い地位が手に入るじゃない。お父さんはそのチャンスをくれてるじゃないの。居場所が何。そんなものアンタが実権握ってから邪魔な人ほっぽり出して作れ

「ばいいでしょ。」

「え、ちよ、リラ、」

「今は一人ぼっちだって、そのうち可愛くて良い家のお嬢さんがお嫁に来てくれる。そうしたら子供も出来て、アンタが自分で幸せな家庭を築ける。もし失敗したらアンタも妾でも持ってそこで居場所作れば良いでしょ」

「甘ったれってんじゃないわよ、と睨まれたが、それから微笑んで。」

「大丈夫。アンタならうまくやれるから。アンタは尋常じゃなく要領良い奴なんだから。」

「自分でもわかってるんでしょ？と笑顔で聞かれる。
「分かっている筈でしょ、でもいきなりの展開にうんざりして、少しだけ目の前の煩雑な作業への気力を失っただけ。少し気が減入っていただけ。ちよつと気力を蓄えれば出来るよ」
ね、とニヤツと笑って言われて。」

「リラ」

「ん、」

「君は、本当に凄い。」

「そうでしょ」

「抱きしめても良い？」

「……今日だけ特別に許可する」

言われた途端にギュッと抱きしめる時に一瞬リラが罪悪感に駆られるような顔をしたけれど、俺はようやく肌で感じられたリラの暖かさが嬉しくて堪らなかつた。

「確かに気は減入るけど、多分、近い将来、リラが言った通りに、ちゃんとやるんだろうな。」

「当然でしょ」

「でも妻の部分は、出来ればリラが良いなあ・・・」
抱きしめたままのリラが小さな声で、そうなら良いね、と呟いた。

親父にちゃんと話しに行くと言紙を返したものの、東京に帰るのは先延ばしにしていた。

リラが、この頃目に見えて具合を悪くしていた。

酷く痩せていたし、隠そうとはしているが血も吐いている。最近はあまり立ち上がろうともしなかった。

「リラ、いい加減病室でも良いだろ、この寒さじゃ体に障る」

「・・・駄目、外じゃなきゃ、会わない」

一度抱きしめてからは、リラが拒否しても触るようのを止められなかった。今も風に当たらないように後ろから抱きしめて、リラには俺の上着を掛けている。

リラは体重をぐったりと俺にかけ、熱があるのかぼんやりした目をしていた。

「リラ、俺と一緒に東京行かないか、東京の医者に見て貰おう」

「・・・いいよ、そんなの」

「諦めるなよ、頼むから」

「ううん、そういう意味じゃなくてね、ねえ京介、私は死なないわよ」

急に声を張り、晴れやかな声で言う。

「死ぬのなんか怖くなかったんだけど。でもあんたが名家の跡取りなんて知っちゃったら、なんか死ぬの悔しくなっちゃって。あんたがまんまと幸せになるのに私だけ死んでなんかやらないわよ」

だから死なない、と不適に笑っている。精一杯強がつて。

「・・・リラ、」

「まあ少なくとも京介が東京から帰ってくるまではね。だから早く行って帰ってきてしつかり名家の後継ぎの座を奪って来て、と茶化してみせる。

体がつらいだろうに、わざと元気そうに振舞って。

この、意地っ張り。

「・・・分かった。なるべく早く戻って来るから」

それまで死なないで、という言葉を読み込む。そのかわり。

「口づけさせて」

「・・・それは駄目だよ」

「させてくれなきゃ行かない」

「・・・人が我慢してたのになあ」

泣きそうな声で言うからもう堪らなかった。

顔を寄せて、唇に触れる。

リラは抵抗しなかった。

リラとの初めての口づけは、それまでの人生での何よりも切なく、ただただ愛しかった。

「これで行ける？」

目に涙を浮かべながらも強気に言って見せるリラが愛しかった。

「うん、とにかく早く帰ってくるから、リラも」

「だから大丈夫だって・・・あ、京介、」

「何？」

「最初に会った時き、私に『君、幽霊？』って聞いたよね、あれなんで？」

「ああ、あれね」

それでリラに話した。リラがあまりに桜の木の下の幽霊に似ていた事。桜の木の下に死体が埋まっているという噂話。

「へえ、面白いね」

思っていた以上にリラは無邪気に面白がった。

「じゃあ、私も、此処の桜が散るまでは頑張るかな」

冗談めかして言った台詞に言葉にこう返すのがやっとなかった。

「じゃあ、またこの桜の木の下で。またね、リラ。」

「今度は信じてる。また、京介。」

枯れ葉の舞散る、冬の初めの事だった。

やっとな帰って来られた時にはもうすっかり春になっていた。

認知や後継ぎの承認、親戚廻りやずっと居なかった家の中の事、その上親父が体調を崩したりしたもののだから、時間はあつという間に経っていった。

ようやく長旅が許されるようになった時には、桜が散りはじめるかというギリギリの所だった。着いてからは走った。

とにかく走って、走って。

散りはじめた桜の花びらを蹴散らすようにひたすらあの桜の山を駆け上がった。

いつの間にか辺りは夜で、最初に彼女に会った時と同じ様に、大きな満月が散りゆく桜を煌々と照らしていた。

まだ散ってない、散りきってない、待ってて、待っててくれる筈。

あの、枝垂れ桜の下で。

目の前の桜が一瞬途切れるのが見えた。もうすぐだ。

息を切らしながら駆け付けたそこには。

舞落ちる花びらの他には、何も、誰も、居なかった。

「ねえ先生。私桜が咲くまで待てると思う？」

彼女がある日ポツリと言った。外の吹雪を見ながら。

「そうだね、気持ち次第だ。君は既に宣告された期限より長く生きている。」

彼のお陰かな、と言えばフフ、と小さく笑った。

「うん、まあ楽しかったから。約束もしちゃったし。でも約束守れそうにないなあ。春は遠すぎるわ」

あいつ怒るかなあ、と呟いて。

「先生にお願いがあるの」

「何かな」

「京介に聞いたの、桜の木の下には死体が埋まってるって話。それはただの噂みたいだけど、どうせなら本当にしちやえば面白いかなって」

私が、死んだら。

「それにそうしたら、噂みたいに京介が来た時に幽霊になって会えるかもしれないわよね」

他の桜から、少し離れて一本だけポツンと生えている枝垂れ桜の下には、本当に死体が眠っている。でも、去年は居た噂の幽霊そっくりな彼女はもう、居ない。

彼女の去年の冗談を思い出して、枝垂れ桜の幹にナイフで歌を刻んだ。

月やあらむ 春や昔の春ならむ 我が身ひとつは元の身にして

今度は在原業平も満足だと思ふよ、リラ。

月も桜も彼女が居ないだけでここまで色を失う。俺だけが此処に一人取り残されて。踵を返して立ち去ろうとすると急に強い風が吹いた。

散りゆく花びらが夜風に乗って舞い上がり、視界を埋め尽くしていく。方向感覚すら失いそうなそれに思わず立ち止まると、それまで聴こえていた唯一の音の自分である足音さえも止み、真の静寂が辺りを包む。

桜の花びらが積もっていく音が聴こえるほどの静寂。

本当にささやかなシンシン、シンシンという音。

静かに、静かに。

くるくると視界を埋める桜色に狂わされたのか。

その中に確かに、一瞬、桜色の長襦袢を着た彼女の姿が見えたのだった。